

造り酒屋の地域貢献活動

—— 群馬県長野原町浅間酒造の事例から ——

塩 月 亮 子

Regional Contribution Activities of a Sake Brewery: A Case Study of Asama Shuzo in Naganohara City, Gunma Prefecture

Ryoko SHIOTSUKI

要 旨：本稿では、地域を活性化するうえで地元企業はどのような地域貢献をおこなうことが望ましいかを考察するため、地元の名家が手掛けることの多い造り酒屋に焦点をあて、その歴史と現在の活動を追った。事例には、八ッ場ダム建設の影響で地域の分断や人口減少等が起き、町の再生が急務とされる群馬県長野原町にある浅間酒造株式会社を取りあげ、歴代の社長が長野原町長になるなど政治家として地元のために活躍してきたこと、多角経営をおこない地元に必要な産業を興し、地元の雇用を促進してきたこと、さらに、現在も土産物販売をおこなう浅間酒造観光センターで地元農家の製品を販売することや「酒造納涼祭（夏祭り）」を当センターで地元向けに開催すること、自社田として休耕地を借り、そこを酒田にして保全することなどを通して、地元貢献している様子を明らかにした。

このような浅間酒造の地域貢献を地域貢献活動の6分野に照らし合わせてみると、浅間酒造は主に①経済の振興に関する活動②文化・環境に関する活動③教育に関する活動、④雇用に関する活動の4分野に腐心してきたことがわかった。また、⑤治安・安全・防災に関する活動や⑥保健・医療・福祉に関する活動も、長野原町長など政治家として、あるいは孤児を養育した櫻井傳三郎や、戦時中に米を地元の人々に分け与えた櫻井かねのように個人として、櫻井家が担ってきたものであったこともわかった。

最後に、浅間酒造観光センターは観光客の集まる拠点でもあるので、観光客を活用し、当該地域の伝統文化の保全や再生、創造に寄与するよう、地元の人々が工夫していくことも大切だと指摘した。そして、浅間酒造が今後地元から最も望まれる地域貢献は、地域で貴重な老舗製造業であるという強みを生かし、地域の人々と協力しながら地元にもふさわしい、地元の人々が誇りとするような地域ブランドを創造・確立していくことであろうと結論づけた。

キーワード：地域貢献活動、地域活性化、酒造、長野原町

はじめに

本稿の目的は、地域を活性化するうえで地元企業はこれまでどのような地域貢献をおこなってきたのか、そして今後はどのような地域貢献をおこなっていくことが望ましいのかを明らかにすることにある。その際、群馬県長野原町における老舗造り酒屋、浅間酒造株式会社の地域貢献史と現在の地域貢献活動を事例としてあげ、そこにみられる特徴を抽出することで、地元企業の地域貢献に関する考察を深めていくことにしたい。浅間酒造を事例とするのは、まずは酒造が日本においては地域の中心的役割を担うことが多かったからという理由による。これは明治以降、酒造の許可を金銭的余裕のある地元の名士が取得し、造り酒屋をはじめたケースが少なくなかったことと関係する。浅間酒造も地域の有力者の手掛ける企業として江戸時代末期に創業、そして明治期から現在に至るまで発展し、地域を支え続けてきた。また、長野原町には川原湯温泉がある。ここは近隣にある硫黄の強い草津温泉での湯ただれを和らげる中性の湯として重宝され、長らく山間の風情ある温泉郷として人気を集めてきた。それが近年の八ッ場ダム建設により水底へ沈むこととなったため、人々は移動を余儀なくされ、地域コミュニティも分断されるなどして、大きな被害

を被った。そのため当該地域は再活性化が急務とされている場所だからということも、選定理由のひとつである。さらに、浅間酒造は当該地域で製造業を旨とする企業であり、新たなものづくりを通じた地域活性化の役割を地元の人々に期待されていることも選定理由となった。

ここで「地域貢献」という言葉の定義をおこなっておく。昨今、企業や大学などの法人、あるいは自治体や協会等の団体、ひいては個人が「社会貢献」をおこない地域をよりよくしていくことが望まれている。この「社会貢献」には、特定の地域だけに公益的貢献をおこなうという意味はない。しかしながら、「地域貢献」という場合には、貢献する先として地理的な地域の枠が想定されており、「社会貢献」のなかに「地域貢献」が含まれると考えられる。従って、地域社会に密着しておこなわれるのが「地域貢献」だと定義できよう。

中小企業の地域貢献に関する研究をおこなっている日本政策金融公庫総合研究所首席研究員の竹内英二は、「地域貢献活動に公式な定義は存在しない」（2009年 p.3）とし、企業へのアンケート調査を実施する際、「地域貢献活動」を次の6分野と31項目に分類した⁽¹⁾。

- ① 経済の振興に関する活動（地場産業の活性化、商店街の活性化、特産品や農水産物など地域資源の活用、創業支援や他企業の経営支援、その他）
- ② 文化・環境に関する活動（祭りや伝統行事の開催や維持、地域における文化やスポーツの振興、地域の美化や緑化、地域の環境保全、その他）
- ③ 教育に関する活動（経済・金融・消費者教育、起業家教育、職場体験・インターンシップの受け入れ、その他）
- ④ 雇用に関する活動（高齢者の雇用・就業支援、障害者の雇用・就業支援、ニート・フリーターの雇用・就業支援、ホームレスの雇用・就業支援、元受刑者の雇用・就業支援、外国人労働者の雇用・就業支援、その他）
- ⑤ 治安・安全・防災に関する活動（防犯活動、交通安全活動、消防・防災活動、その他）
- ⑥ 保健・医療・福祉に関する活動（高齢者の生活支援、障害者の生活支援、生活困窮者やホームレスの支援、食の安全確保、育児支援、その他）

浅間酒造株式会社およびその母体である櫻井家は、上記の「地域貢献活動」の6分野はほぼすべてに関わってきた経緯がある。そこで次章では代々浅間酒造の社長を輩出してきた櫻井家の地域貢献を中心とした歴史をインタビュー⁽²⁾、およびいくつかの文献⁽³⁾をもとに示していきたい。

1. 櫻井家と地域貢献

1-1. 長野原町の概況

浅間酒造株式会社がある群馬県長野原町は、群馬県西北部の長野原盆地から浅間山北東斜面にかけて位置しており、古くから上田街道の要地として栄えていた。同町羽根尾交差点では軽井沢へ向かう国道146号および上田街道を形成する144号と155号の3国道が結節している。草津、白根、志賀高原方面に行く国道292号線や高崎への国道406号線（草津街道）も同町を起点とし、交通の要所となっている。鉄道はJR吾妻線が通っている。また、同地域は浅間高原や白根山、草津温泉などを中心とする上信越高原国立公園の観光基地であり、草津温泉のほか万座温泉や四万温泉、河原湯温泉など温泉の宝庫でもある。南側には別荘地である北軽井沢があり、多くの観光地の結節点となっている（鈴木他 2013年 p.93）。また、同町の北東側には吾妻溪谷を利用した八ッ場ダムが建設中で、先述したように川原湯温泉をはじめ旧吾妻線の線路などが水没する予定となっている。

長野原町の現在の人口は5,722人（2017年12月現在）、総面積は133.85km²で、少子高齢化が進み、人口は年々減少している。例えば、1980年は人口7,237人、うち老年人口割合は11.6%、後期老年人口割合は4.2%だったが、2015年には人口5,536人、うち老年人口割合は32.8%、後期老年人口割合は17.3%となるなど、人口減少が進み老年人口割合は激増していることがわかる⁽⁴⁾。

1-2. 櫻井家の歴史（親族図1参照）

(1) 櫻井傳三郎

『長野原町誌』（下巻 pp.551-565）には、「町の人物・旌表者」として櫻井家⁵⁾のなかでは櫻井傳三郎が最初に紹介されている。彼は安政6年（1859）～大正6年（1917）にかけて活躍し、初代、2代、6代、11代、14代、17代の長野原町長となった人物である。傳三郎は草津にも近く、水が豊かで水車なども多くあった大津村（長野原町大字大津64番地）の名望家、傳之丞の嫡男に生まれた。

傳三郎は明治16年（1883）、24歳で長野原連合戸長、明治18年（1885）学務委員、明治20年（1887）衛生組合長を歴任し、明治27年（1894）には北白川宮家応桑牧場の施設に尽力、明治22年（1889）新長野原町の初代町長に選出され、町長時代吾妻の西部東部の文化経済の架け橋となる道陸神峠の道を開通させたという。

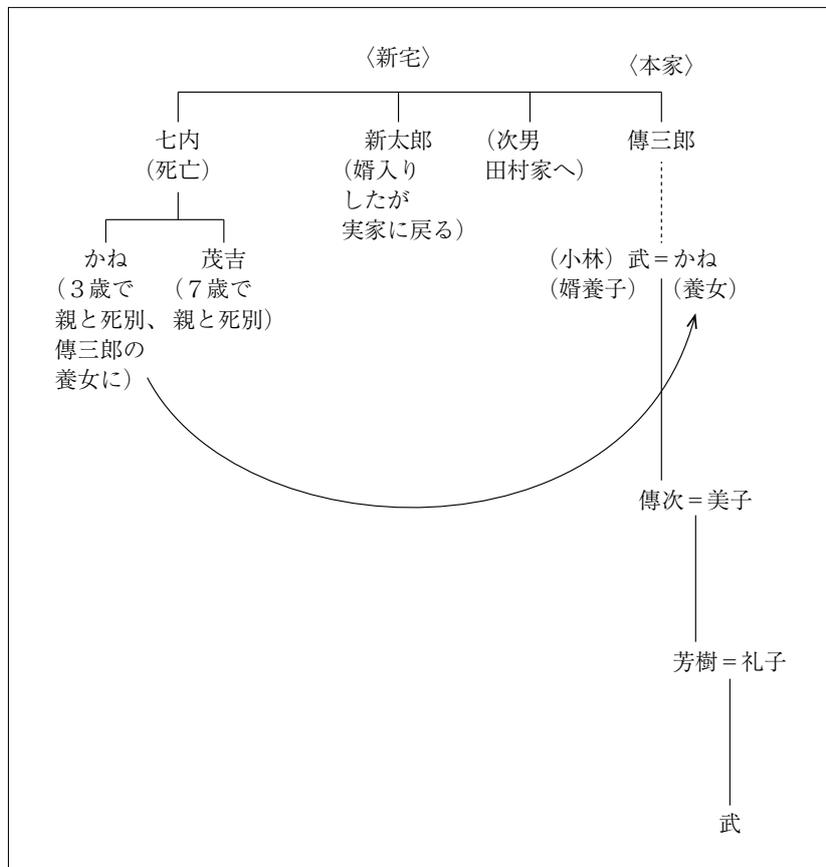
明治40年（1890）に郡会議員となると、長野原用水開通における水源地の確保、用水使用者との交渉をおこない、明治41年（1908）には吾妻温泉馬車会社設立し、社長に就任した。明治43年（1910）に吾妻川の大水害で沿岸が崩壊し、交通が杜絶したときは仮普請・仮橋を設置し、人馬の往復ができるよう尽力した。

その他、小学校の統合と校舎建築・増改築、大日本産馬会社長野種馬所長野原種付所の設立、捨子を育て、町民の薄命児一女を救済したりする篤志家でもあった。捨子の育成は傳三郎に実子がいなかったことに関係するかもしれないが、櫻井美子氏も特にそのような話は聞いたことがないとのことであった。

以上をみると、櫻井傳三郎は主に明治～大正時代に町長や郡会議員などの政治家として道路の開通や水源地の確保、仮橋設置など、地域のインフラ整備や災害復興などで活躍する傍ら、畜産振興や馬車会社設立など新たな地域産業を主導し、福祉的な慈善事業もおこなった人物であったことがわかる。

(2) 櫻井新太郎

櫻井新太郎は櫻井傳三郎の実弟で、明治5年（1872）～昭和27年（1952）まで活躍した人物である。彼は兄と同じ



親族図1 櫻井家家系図（インタビューをもとに筆者作成）

く数期にわたり長野原町長を務め（20代、23代、27代）、大正初期には馬車鉄道会社を設立して社長に就任するなど、政治家および実業家として数々の地域貢献をおこなった。また、家の住所も兄と同じく大津（大津85番地）であった。

新太郎の経歴をより詳しく紹介する。彼は明治26年（1876）、中之条区裁判所長野原出張所に勤務し、明治31年（1881）には与喜屋小学校の臨時職員、明治32年（1882）長野原町役場の書記を経て、明治36年（1886）～明治44年（1894）までは収入役、明治44年（1894）～大正14年（1925）までは郡会議員、明治45年（1895）には長野原町消防組頭、そして大正2年（1913）には炭や薪を馬車で運送するための草津馬車鉄道会社を設立し、社長に就任した。

大正10年（1921）には長野原町長就任する。それ以降、大津草津間の道路拡張、役場庁舎の新築、吾妻郡農事試験場の誘致、大津稚蚕飼育所の設立、北軽井沢地区の開発、観光、造林事業の造成、満州事変在満日軍慰問団吾妻代表等を務めた。また、長野原雲林寺檀徒総代や明神神社氏子総代、前橋地方裁判所調停委員にもなり、地域の産業や文化のために尽くした。

これらの実績のなかでも注目されるのは、観光開発であろう。馬車鉄道会社の設立や道路の拡張などのインフラ整備とともに、観光地としての長野原町の整備を目指したことは、現在の観光による長野原町の活性化の試みにもつながるといえる。

(3) 櫻井茂吉

櫻井茂吉は櫻井傳三郎の甥にあたり、伯父たちと同様に長野原町長（25代、31代）を務めた人物で、明治32年（1899）に生まれ、戦後高度経済成長期の昭和38年（1963）に没した。住所は長野原町大字長野原30番地の1となっており、

表1 浅間酒造株式会社の歴史

寛政年間（1800年ごろ、江戸時代末期）	群馬県長野原町で櫻井酒造店として創業
明治5年（1872）	初代経営者 櫻井傳三郎が明治政府より酒類免許鑑札を正式に下付
明治6年（1873）	「櫻川」清酒造石高100石（1万8千リットル）醸造
昭和27年（1952）	浅白観光自動車株式会社 設立（タクシー・マイクロバス・ビジネスホテル事業部門）
昭和28年（1953）	櫻井 武に経営継承
	株式会社化（浅間酒造株式会社へ）、免許切替取得（清酒製造免許・焼酎甲類免許）
昭和39年（1964）	武の長男、櫻井傳次が株式会社草津白根観光ホテル櫻井を創業
	収容人数400人、地元雇用がほとんど（現在も）
昭和49年（1974）	櫻井傳次が社長就任
	ホテル櫻井の増改築
昭和51年（1976）	ホテル櫻井 リニューアルオープン 収容人数800人
昭和52年（1977）	リキュール製造免許の取得
昭和54年（1979）	ホテル櫻井 新館増築 収容人数1200人
昭和62年（1987）	櫻井芳樹氏が社長就任
	浅間酒造観光センターを開業…酒やお土産売り場、食堂など
昭和63年（1988）	浅間酒造観光センターを増築、食堂を拡充
	本社工場が完成
平成2年（1990）	芳樹氏、長野原町議会議員に
平成3年（1991）	浅白観光自動車株式会社を浅間酒造株式会社が子会社化
	マイクロバス部門は2011年設置。貸し切りバスのほか、嬭恋村からのスクールバスも運行
平成5年（1993）	果実酒免許取得
平成8年（1996）	芳樹氏、長野原観光協会の設立・会長へ
平成10年（1998）	新観光センター施設を竣工
	第二工場を建設
平成13年（2001）	焼酎乙類の免許取得
平成21年（2009）	傳次、死去
平成26年（2014）	武氏、浅間酒造株式会社 社長就任

（鈴木源太郎他著「第3章 酒造業・観光業を核とした地域型多角経営の展開 ケース3—浅間酒造株式会社・桜井芳樹氏の地域とともに歩む経営哲学—」と浅間酒造観光センターのウェブ・ページ「会社概要」および「沿革」をもとに、筆者作成）

大津ではなく長野原に住んだことがわかる。これは明治42年（1909）9月、大津の家が灯籠の火からの出火により全焼し、その年の11月には長野原町に移転したためと櫻井美子氏からうかがった⁽⁶⁾。

茂吉の経歴をみると、彼は明治39年（1906）、7歳で両親と死別し、大正7年（1918）、19歳で叔父傳三郎が死去するとその跡を継ぎ、酒造業と醤油醸造業を経営した。しかし、茂吉の妹で傳三郎の養女となったかね⁽⁷⁾の夫である小林武が傳三郎の婿養子となったため、すべての事業を武に譲り、木材業（後の群馬木材株式会社）を開業した。

茂吉は大正9年（1920）に長野原町青年団長、昭和2年（1927）に長野原消防組第一部長、昭和4年（1929）に長野原町会議員、昭和7年（1932）に長野原町長、昭和10年（1935）に長野原町会議員、昭和22年（1947）から3年間は長野原町長と、町会議員や町長を長年務めてきた。戦前の町長時代には、川原湯地先の新千歳橋の永久橋架替やハツ場大橋の鉄橋架設、国鉄吾妻線の誘致、戦後は東西両中学校の校舎建築とそのための建築用木材の供出などをおこない、昭和25年（1950）には中之条家庭裁判所調停委員、昭和28年（1953）には長野原町公平委員を務めている。

茂吉もこれまでの櫻井家の男性と同じく政治家として地域貢献に献身し、戦前は橋を架け、戦後は国鉄吾妻線の誘致や中学校の校舎新築と、伯父傳三郎や新太郎と同じく地域発展のために力を注いだ。

ここで再確認しておきたいことは、茂吉は伯父の傳三郎から家業の酒造業を引き継いだ、それを妹の夫で傳三郎の婿養子となった小林武（後の櫻井武）に譲ったという点である。

(4) 櫻井武（もと小林武）

櫻井武は櫻井茂吉の妹、櫻井かねの夫で、傳三郎の婿養子となった人である。彼は大津出身で、後に妻の兄である櫻井茂吉と同じ長野原町大字長野原30番地に住んだ。武は明治35年（1885）に生まれ、昭和49年（1974）に没した。なお、現在の浅間酒造株式会社の代表取締役社長、櫻井武氏とは同姓同名であるが、ここで紹介する武は現在の武社長の曾祖父にあたる人である。

櫻井武（もと小林武）は大津の旧家（農家）、小林茂太郎の三男⁽⁸⁾として生まれ、営林署の役人をしてきた。その後、傳三郎の婿養子となり酒造業を本業とする櫻井宗家を継承し、長野原町町長（33代、34代、45代、36代、37代）も長く務めるなど、現在の櫻井家を発展させた人であった。

櫻井武は昭和6年（1931）に消防手、昭和9年（1934）には消防小頭、昭和15年（1940）には警防団分団長、昭和19年（1944）には警防団副団長、昭和20年（1945）には警防団団長となり、消防や警防に力を注いできた。しかし、昭和17年（1932）には大政翼賛壮年団長となったため、戦後は公職追放となった。

戦後しばらくは家業に励み、昭和23年（1948）には閑散期（夏期）を利用し、地元の水を用いたサイダーを製造、昭和24年（1949）には焼酎を製造した。また、銘酒櫻川は「浅間正宗」と改称し、全国方面に出荷した。

その後、昭和29年（1954）から20年間、長野原町長として校舎・体育館等の増築新築、学校給食の完全実施、国道145・146号線の全面舗装の完工、町村道改良工道の促進（路床改良、新渡橋の架替）、応桑用水、土地改良工事推進、農業構造改善事業（応桑）を実施し、昭和34年（1959）には群馬県簡易水道協会長、全国簡易水道組合長、町営母子健康センターの開設、西吾妻環境衛生センターの設置などをおこなった。また、町営の浅間園は東急・西武を相手に紛糾していたのだが、妥結へ導いたという。その他、吾妻郡町村会長や吾妻総合開発協会長も歴任した。

このように、櫻井武は櫻井家には婿養子として入り、それまでの櫻井家の家業である酒造を受け継ぐとともに、櫻井家が代々担ってきた政治家となることにも応え、地域開発を促進してきた。

この武とかねとの間に誕生したのが櫻井傳次であり、彼は後の昭和39年（1964）、草津にホテル（株式会社草津白根観光ホテル櫻井）を建てることとなる。また、その嫡男の櫻井芳樹氏（現・草津温泉 ホテル櫻井 代表取締役）、およびそのまた嫡男の櫻井武氏（現・浅間酒造株式会社 代表取締役）は、これまでみてきたような脈々と続く櫻井家の地域貢献の伝統を現在引き継いでいる。

次章では、櫻井武（もと小林武）以降の世代の動きに関して、浅間酒造株式会社の歴史を中心に述べていくことにする。

2. 浅間酒造株式会社の歴史と現在

本章では、主に鈴木源太郎他著「第3章 酒造業・観光業を核とした地域型多角経営の展開 ケース3—浅間酒造株式会社・桜井芳樹氏の地域とともに歩む経営哲学—」や浅間酒造観光センターのウェブ・ページ「会社概要」および「沿革」をもとに、浅間酒造株式会社の歴史と現状をみていきたい（表1参照）。

鈴木らの論文によれば、群馬県における清酒の特徴として、赤城山・榛名山・妙義山などの良質な水資源（軟水）があるため、ソフトな飲み口という点があげられるという。また、上信越の澄んだ空気および低温の環境により酒造に適した良質な微生物群の育成が可能なこと、地元で収穫される良質な原料米も酒造りに使用されることなども指摘している（鈴木他 2013年 p.92）。しかしながら、浅間酒造株式会社代表取締役の桜井 武氏によれば、浅間酒造では地元の米はあまり使用してこなかったという。今後は地元での米づくりとその使用をもっと進めていきたいとのことであった（なお、筆者が2018年1月20日に浅間酒造観光センターを訪れた際、純米大吟醸「ハッ場の風」は自社栽培の酒米を使用し、地産地消を掲げ、100%地元の物にこだわった究極の一本というポップを目にした。地元での米づくり・酒造りが始まったと捉えられる）。

続いて、浅間酒造株式会社の歴史をたどる。寛政年間（1800年ごろ、江戸時代末期）、浅間酒造は群馬県長野原町で櫻井酒造店として創業された。明治5年（1872）になると、櫻井傳三郎は明治政府より酒類免許鑑札を正式に下付され、浅間酒造の創業者となった。当時、長野原町には5軒ほどの酒造があり、浅間酒造の前身である櫻井酒造は明治6年（1873）には「櫻川」という品名の清酒を100石（1万8千リットル）醸造していた記録がある（鈴木他 2013年 p.84）（写真1参照）。



写真1 浅間酒造発祥の地 長野原町大津（2017年8月17日 筆者撮影）

また、浅間酒造は酒造を中心としながらも「地域経済への貢献を正面に見据えた多角化戦略」（鈴木他 2013年 p.84）を実施し、関連会社の設立をおこなってきた。具体的には、昭和27年（1952）には浅白観光自動車株式会社（タクシー・マイクロバス・ビジネスホテル事業部門）を設立している⁽⁹⁾。特にタクシー事業部門は草津高原エリアの観光の足として、今でも重要な役割を果たしている（現在の社長は桜井 武氏）。

昭和28年（1953）には傳三郎の婿養子、桜井 武に経営継承がなされた。武は浅間酒造の株式会社化を実行し、清酒製造免許・焼酎甲類免許の切替取得もおこなった。

武の社長時代、先程も述べた通り、昭和39年（1964）には武の長男、桜井傳次が収容人数400人ほどの「株式会社草津白根観光ホテル櫻井」を創業した。当初、草津は自社の酒の販売先と考えていたという。当ホテルの従業員は地

元雇用がほとんどで、それは現在も同様ということだった。昭和49年（1974）、次の経営者に櫻井傳次が就任し、ホテル櫻井の増改築をおこなった。ホテル櫻井は昭和51年（1976）にリニューアルオープンし、収容人数は800人ほどとなった。また、昭和52年（1977）にはリキュール製造免許の取得、昭和54年（1979）にはホテル櫻井の新館増築をおこない、収容人数1200人となった。

昭和62年（1987）、次期経営者に櫻井芳樹氏が就任し、ロードサイドビジネスとして、酒やお土産売り場、食堂などを備えた「浅間酒造観光センター」を開業した。昭和63年（1988）には当センターを増築し、食堂を拡充、現本社工場も完成した。

平成2年（1990）芳樹氏は長野原町議会議員となる。これは代々櫻井家の人々が町長や議員など政治家として活躍してきた歴史を継承するものであった。

平成3年（1991）、浅白観光自動車株式会社を浅間酒造株式会社が子会社化、マイクロバス部門は平成23年（2011）に設置され、貸し切りバスのほか、嬭恋村からのスクールバスも運行した。このように、学校と係わるのも櫻井家の特徴のひとつといえる。

平成5年（1993）には果実酒免許、平成13年（2001）には焼酎乙類免許を取得した。現在、浅間酒造の取り扱う酒の種類が多いのも、多種酒の免許を取得してきたからにほかならない。

また、芳樹氏は平成8年（1996）に長野原観光協会を設立し、会長に就任する。そして平成10年（1998）に新観光センター施設を竣工し、そこを近代的な第二工場として建設した。また、酒類卸売業、および酒造りの閑散期である夏場の仕事として地元特産饅頭生産をおこなうため、「榛名酒販株式会社」も設立した。平成17年（2005）には、ガソリンスタンドである「吾妻サービスステーション」を浅間酒造観光センターの隣接地に移転した。

平成26年（2014）、櫻井武氏が浅間酒造株式会社の代表取締役就任する。現在、浅間酒造では「秘幻」、「八ッ場の風」、「草津節」、「浅間錦」などの清酒や季節限定酒、伝統製法の少量生産「浅間山」、焼酎（清酒の副産物）、リキュール、果実酒などの豊富な種類の酒造りをはじめ、その副産物を利用してTosite「ひげんコスメ」などのコスメ、お菓子・食品、肥料の生産までおこなっている。

以上が浅間酒造の江戸寛永年間から現在までの約150年にわたる歴史の概観だが、そこからうかがえるのは、①酒の種類が多様化、②経営の多角化、③バスやタクシー、ホテル、観光センターなど観光方面への進出である。なかでも③の観光との結びつきを強めたのは櫻井武（もと小林武）やその子、傳次の時代からで、草津におけるホテル開業とその事業の拡大は、観光業に浅間酒造が本格的に乗り出す要因となったといえる。

このように、浅間酒造は時代を見据えて多角経営をおこなってきた。また、酒造りも手作業から装置産業化へ、すなわち家業から企業へと変化させ、本社工場では今でも伝統的な仕込み法で手作りの高品質な酒を生産しているのに対し、新しい第二工場（浅間酒造観光センター）では最新のコンピュータ制御でより多くの酒造りをおこなっている。しかしながら、そこには杜氏制度（寒造りの時期に地域外から来る職人集団）による清酒製造が高齢化や後継者不足で機能しなくなるなどの問題も出てきた。その解決法として杜氏を外部から招くのではなく自社の蔵人による酒造りに変えたが、それは各地を回って酒造りの指導をおこなってきた杜氏と蔵元の分離を促すこととなり、技術伝承に困難が生じている。浅間酒造では、現在、蔵人は櫻井武社長と宮崎友雅氏の2人のみという。

杜氏や蔵人の減少問題に加え、浅間観光センターの年間来客数は平成10年（1998）ごろがピークで150万人ほどだったが、平成23年（2011）度の入込客数は65万人となるなど、今に至るまで減少傾向にあることも問題だという（鈴木他2013年p.105-106）。その原因としては、団体旅行から個人旅行の変化により大型バス利用が以前より減少する、個人旅行者が試飲を避ける、あるいは同じような地元物産品やお土産を扱う店舗が近隣に建設されたことなどがあげられるだろう。このような状況のなか、地域貢献の精神を一層発揮し、自社の一人勝ちではない地域全体の活性化に向けて努力している浅間酒造の姿がうかがえる。

次章では、現在、浅間酒造株式会社がどのような地域貢献活動をおこなっているのかを、代表取締役の櫻井武氏をはじめ、浅間酒造観光センター販売部係長の塩野谷武人氏、同社営業課の福原千春氏へのインタビュー、および現地調査からみていきたい（インタビューは2017年7月15～16日、8月17～18日、8月26～29日に実施）。

3. 浅間酒造株式会社による現在の地域貢献活動

浅間酒造観光センターは群馬県吾妻郡長野原町長野原1392-10にある。そこでは自社製品である清酒やリキュール、饅頭やどら焼きなどのお菓子、コスメ等のほかに、多種多様な製品が贈答品や土産物として販売されている。また、センターにあるさくら亭などは、法事や会合などで地元の人を使う場所となっている。

櫻井 武氏によれば、約20年前に観光センターが現在の場所に移ってきたのは、ダム建設で道が変わり、人の通りも変化するという理由からだったという。センターが元あった場所（群馬県吾妻郡長野原町長野原30-8）は今タクシーの事務所と菓子工場、ホテル櫻井のクリーニング工場になっている。

マイカーや観光バスはここを通るが、路線バスはまだ以前の場所のほうを通っており、必ずしも町の人の通り道ではない。しかしながら、最近、ここの裏に橋が架かり、地元の人も来やすくなったということだった。

そのなかで、地元の活性化に寄与する事例が複数みられるので、以下に紹介する。

(1) 土産物（写真2参照）

福原千春氏によれば、浅間酒造センターにある製品は数年前までは自社製品のみだったが、外部アドバイザーの意見などから仕入れも始めたという。そのなかには東吾妻の畑から採れたこんにゃくを用いた製品（地元の農園による製造）などもある。自社からでた酒粕を利用し、外部に依頼して奈良漬や山芋入りかまぼこなども作ってもらっている。また、ワインも頼んで作ってもらっている。化粧品は大吟醸発酵液を利用した自社製品で、リピーターも多く電話注文もある。麴を使った浅間の酒まんじゅうや、精米でいらなくなったところを使用した胡麻餅も自社製品である。酒まんじゅうは30年の歴史がある。どら焼きもヨーグルト味など季節ものを出すとのことであった。

このように自社製品も多いが、そのほかにも地産作物を用い、地元農園などに加工を依頼した製品も多数販売されている。



写真2 浅間酒造観光センターにある土産物〈山芋かまぼこ〉(2017年7月15日 筆者撮影)

(2) 「浅まるしえ」(写真3・4参照)

浅間酒造センター奥にある「浅まるしえ」のコーナーは、以前は試飲コーナーだったところを利用し、平成25年(2013)から櫻井 武氏の発案で地元の農家と協力し、野菜や加工品を販売するためのコーナーにした。そのきっかけは、近くにできた「道の駅八ッ場ふるさと館」に客が流れるという危機感からであった。このコーナーは3年くらい経ってようやく周知され、観光客以外にも地元の人や社員がスーパーより安いので買っていくという。筆者がみた

ころ、それほど人でにぎわっているわけではなかったが、地域の産物や製品（なかには障害福祉サービス事務所「やまどり」の人の手作り商品もあった）を扱うことで、地域貢献の役割も大いに果たしているといえる。



写真3 「浅まるしえ」の地元産農産物
(2017年7月15日 筆者撮影)



写真4 「浅まるしえ」の伝統工芸キジ車
(2017年8月18日 筆者撮影)

(3) 酒造納涼祭（夏祭り）（写真5参照）

筆者は平成29年（2017）7月15日（土）に浅間酒造観光センターの駐車場でおこなわれた「酒造納涼祭（夏祭り）」を見学した。その時の観察、および関係者へのインタビューから、納涼祭（夏祭り）の様子を報告する。

この納涼祭（夏祭り）の考案者は、当センター販売部係長の塩野谷武人氏である。彼によれば、この祭りは今回で4回目となり、1回目は晴れて盛況、2回目は大雨で中止、3回目は雨のため建物内でおこなったが、今日の4回目は晴れなので、1回目の時のように盛況とのことだった。



写真5 「酒造納涼祭（夏祭り）」での上州応桑関所太鼓（2017年7月15日 筆者撮影）

次に、平成29年（2017）7月15日（土）の酒造納涼祭（夏祭り）のスケジュールを示す（表2参照）。

表2 酒造納涼祭（夏祭り）スケジュール

13:00	長靴飛ばし大会…長野原町商工会議所青年部主催。浅間酒造は場所を貸した。
～15:00	(長靴は長野原町の形を表す。色々なところでこの大会を参加費無料で実施している。商品は地元のお菓子詰め合わせ)。
15:00	塩野谷武人氏の挨拶。浅間酒造の納涼祭開始。
15:15	長野原ダンスクラブ(5チームのうち2つが出席。障害者チームも手話の踊りなどを前半で踊る※1) 長野原キッズダンスクラブ(「プリティ・キッズ」)の踊り
15:45	浅間山サイダー早飲み大会(子供の部・大人の部それぞれ10名ずつ賞をもらえる。1～3位までは「浅間まるしえ」出品者の協賛品であるトウモロコシが賞品としてもらった。)
16:00	じゃんけん大会(塩野谷氏と勝負。1位は売店にお菓子を出している企業の協賛品のお菓子の詰め合わせがもらえる)
16:30	嬌恋ダンスクラブ「ZERO 戦」※2
17:00	フラダンス(嬌恋からの参加。フラダンスの先生は長野原の人)
17:10	六合八間太鼓(女性中心の団体、旧六合村、現中之条のチーム)
17:40	フラダンス(嬌恋。上に同じ)
17:50	ビンゴ大会
18:30	キッズダンス(長野原ダンスラバース) 長野原音頭(盆踊り)…大津老人会、羽根尾区老人会
19:00	上州大桑関所太鼓(男性ばかりのチーム。伝統的な演目のほかに、皆で楽しめるよう新しく造った「まつり」という曲目もある。北軽井沢の人々が参加。)
19:30	スイカ割り
20:00	終了

※1 長野原にある介護施設にダンスの先生が教えに行っている。その人からなかなか発表する場がないと聞いて、酒造納涼祭(夏祭り)に参加してもらった。

※2 ダンスの先生は中之条の人で、塩野谷氏の友人。その人に声をかけたら、中之条のチームと嬌恋のチームが参加した。

スケジュールをみてもわかるように、この祭りは観光客のためではなく、長野原町の人々のための交流・発表の場となっている。参加者は長野原町の様々な地域から来ており、この場がお互いに知り合う機会にもなっている。

企画者の塩野谷氏は、祭りの目的を次のように語っている。「納涼祭をやると思ったきっかけは、入社2年目で中之条町出身の自分は同じ吾妻内とはいえまだ長野原町のことをよく知らなかったし、地元の人にもあまり浅間酒造が知られていないと感じ、浅間酒造がこういうことをやっていると地元の人に知ってほしいと思ったから社長に提案した」。「なぜ祭りか」といって、北軽井沢ではお祭りはやっていると思うがここからは遠い、また10年以上前、旧センターがあるところで歩行者天国にして祭りをおこなっていたが、役所の予算がなくなった関係でそれが中止となり、このあたりで祭りが無くなってしまった。そこで、地元の人向けに子供も楽しめるイベントを考え、夏祭りがよいと思った(2017年8月18日の浅間酒造観光センターでのインタビューより)。櫻井 武社長も「やってみなさい」と許可したので、実行に移したという。

以下も、塩野谷氏の話を紹介する。第1回目と比較し、現在は祭りの参加団体が増えた。初回からずっと参加しているのは上州大桑関所太鼓と長野原ダンスクラブであるが、長野原町の人がほとんどだった。今回(第4回目)は吾妻界隈の人々も参加し、範囲が広がっていった。塩野谷氏は特にどこの地域の人でも隔たりなく参加を促す声をかけ、参加したいという団体を受け入れているという。そのかいあってか、今は地元の人々が浅間酒造観光センターの敷地を「踊りを踊れる場所」と見始め、親しみをもつようになってきてくれた。「長野原は楽しい町」と紹介することができれば嬉しい。そして、今後は子供やその家族だけではなく、年配の人でも面白いと思えるような内容を盛り込んでいきたい。ただし、このような地元志向の祭りは、地元の人々が楽しみにしていることが多いが、参加団体が増えれば飲食の接待で赤字になるなどのマイナス点もあるので、さらなる工夫が必要とのことであった¹⁰⁾。

なお、浅間酒造は平成19年(2007)ごろから平成27年(2015)まで、3月に酒造りが終わり酒ができた「こしき倒し」のお祝いとして、できた酒をふるまう「蔵フェスタ」をやっていたが、観光客に地元の商品をPRすることがメインとなっていたので、地元の人々が楽しむことのできる新たな祭りを企画したという。

(4) 自社田（酒田）⁽¹¹⁾での米づくり（写真6参照）

現・浅間酒造株式会社代表取締役の櫻井 武氏のと時から、浅間酒造では地元の休耕田（草木原集落）を約1丁歩4反借り上げ、米づくりをおこなうようになった。それには環境保全の意味合いが大きい。休耕田になったところには山から猪が降りてきたり、荒れ果てた景観となったりしたので、そうさせないためにも田を再生することが大切という信念のもと、実施しているという。ちなみに、自社田の管理・指導は武氏の義父がおこなってくれている。しかし、高齢化の問題もあり、今後どうするかを考えなければならないとのことであった。

平成29年（2017）11月19日（日）、長野原町山林開発センターで「長野原町に新しい芽を出そうプロジェクト—観光を学ぶ女子大生が種をまき、町民が水をやる大作戦—」という長野原町研究の成果報告シンポジウムが開催された。その時、跡見学園女子大学の学生たちは、この自社田を活用して米から発酵まで、自分だけの酒造りをおこなうプランを提案していた（写真7参照）。田植え、稲刈り、酒造りを地元の人や観光客が一貫しておこない、休耕田を酒田に変える手伝いができるプランは、宣伝を工夫すれば今人気の体験観光やグリーンツーリズム、あるいは環境保全を目的としたエコツーリズムや社会貢献的なツーリズムに繋がるものとして、大いに興味を持たれるものとなる⁽¹²⁾。



写真6 自社田〈酒田〉
(2017年8月17日 筆者撮影)

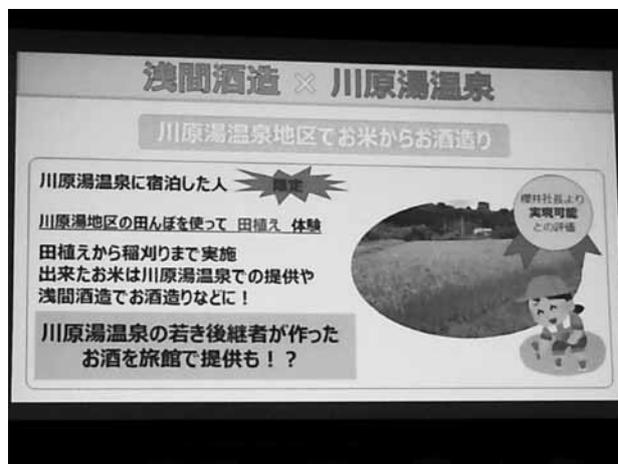


写真7 跡見の学生による「お米からお酒造り」プラン発表
(2017年11月19日 筆者撮影)

おわりに

浅間酒造株式会社の歴代の社長たちは長野原町長や町議会委員になるなどして、政治的に地元のために活躍してきた。また、事業に関しても多角経営をおこない、地元に必要な産業を興し、地元の雇用を促進してきた。

さらに、現在、浅間酒造は浅間酒造観光センター内の「浅まるしえ」などで地元農産物をはじめとする地元製品を販売し、「酒造納涼祭（夏祭り）」では当センターの駐車場を利用し地元の芸能や現代風ダンス、自社サイダーの一气飲みやじゃんけん大会などを楽しむ地元志向の祭りを催したりなどして、地元に貢献する姿勢をより明確に打ち出している。

なかでも注目すべきことは、地元の休耕地を借り、そこを酒田にするプロジェクトをおこなっている点である。これは①環境保全、②田の所有者の高齢化問題解決、③他社との差異感を出し、地産地消の地元ブランド酒を造る、という点に繋がる地域貢献活動とみることができる。

本稿の目的は、地域を活性化するうえで地元企業はこれまでどのような地域貢献をおこなってきたのか、そして今後はどのような地域貢献をおこなっていくことが望ましいのかを明らかにすることであった。

最初に示した「地域貢献活動」の6分野と浅間酒造の活動を照らし合わせてみると、①経済の振興に関する活動（地場産業の活性化、特産品や農水産物など地域資源の活用）、②文化・環境に関する活動（祭りや伝統行事の開催や維持、地域における文化の振興、地域の美化や緑化、地域の環境保全）、③教育に関する活動（職場体験）、④雇用に関する

活動（地元の人への雇用・就業支援）の4分野は、浅間酒造がこれまで企業として腐心しおこなってきた事柄であったといえる。

また、⑤治安・安全・防災に関する活動（災害時の架橋などの対策）や⑥保健・医療・福祉に関する活動（生活困窮者への支援、育児支援等）も、長野原町長など政治家として、あるいは孤児を養育した櫻井傳三郎のように個人として、櫻井家実践してきたことであった。櫻井美子氏によれば、浅間酒造は精米もしているの、戦時中は子沢山の家などに米を分けてあげるなどした。だから戦後に「かねちゃんには随分助けられた」と地元の人からよく感謝されたという（2017年8月26日のインタビューより）。

このように、浅間酒造株式会社は地元の老舗企業としてこれまで多岐にわたる地域貢献活動をおこない、また、現在も酒造納涼祭（夏祭り）や休耕田を借りての酒田づくり等を通して地元に必要な貢献をしていることが明らかとなった。

浅間酒造観光センターに関していえば、今後も地元の人同士の結びつきを強化する拠点、さらに地元の人々と観光客とを結びつける交流の拠点としての機能を果たしていくだろう。その際、観光客のもつ力を活用し、それを地元の伝統文化の保全や再生、あるいは創造へと結びつけていくことが必要となる。そして、浅間酒造株式会社として今後望まれる地域貢献は、これまで多くの地域貢献活動をおこなってきたという伝統ののちのちのうたえで、地域で貴重な老舗製造業であるという強みを生かし、地域の人々と協力しながら地元にもふさわしい、地元の人々が誇りとするような地域ブランドを創造・確立していくことであろう。

〈謝辞〉

本原稿を作成するにあたり、次の方々に多大なご助力をいただいた。まずは浅間酒造株式会社代表取締役の櫻井武氏、およびそのご母堂様（櫻井芳樹夫人）の櫻井礼子氏、櫻井武氏のご祖母様（櫻井傳次夫人）の櫻井美子氏に深謝の意を表したい。櫻井武氏には大変お忙しいところ様々な便宜を図っていただき、会社や櫻井家をはじめ、地元の歴史や文化、酒造りのことなど、本当に多くのことをご教示いただいた。また、櫻井美子氏と櫻井礼子氏には櫻井家の歴史に関する貴重なお話をご自宅で快く教えていただいた。さらに、浅間酒造の納涼祭（夏祭り）を企画・実行なさっていらっしゃる浅間酒造株式会社センター販売部係長の塩野谷武人氏、同センター営業課の福原千春氏、若手蔵人の宮崎友雅氏にも「酒造納涼祭（夏祭り）」をはじめ、跡見学園女子大学の学生たちによる浅間酒造での「酒蔵ツアー」の企画・実施等にあたり、大変お世話になった。この場を借り、皆様に心からの謝意を表したい。

〈注〉

- (1) 竹内 2009年 p.3 参照。
- (2) 筆者は2017年7月15～16日、同年8月17～18日、同年8月26日～29日に長野原町を訪れ、浅間酒造に関する現地調査をおこなった。櫻井家の歴史に関するインタビューは、そのうちの8月26日、現・浅間酒造株式会社代表取締役の櫻井武氏の父方祖母である櫻井美子氏（昭和3年生まれ）に対しておこなったインタビューをもとにしている。なお、武氏の母である櫻井礼子氏もこのインタビューに同席してくださった。美子氏は20歳のときに櫻井家に渋川から嫁に来たという。礼子氏は河原湯の旅館出身で、昭和48年（1973）に櫻井芳樹氏と結婚したという。
- (3) 1章は主に『長野原町誌』上巻・下巻（1976年）、2章は鈴木他「第3章 酒造業・観光業を核とした地域型多角経営の展開 ケース3—浅間酒造株式会社・桜井芳樹氏の地域とともに歩む経営哲学—」（2013年）を参考にした。
- (4) 統計メモ帳「長野原町の5歳年齢階級別人口の推移」「長野原の人口に関する主な指数」<https://ecitizen.jp/Population/City/10424>（2018年1月12日アクセス）より。
- (5) 『長野原町誌』上下巻には「桜井」と出ているが、櫻井武氏や櫻井美子氏へのインタビューから正しくは「櫻井」であると言われたため、本稿での表記はそれに従いすべて「櫻井」と記す。また、櫻井傳三郎の「傳」の字も、町誌には「伝」と載っているが、これも櫻井美子氏など櫻井家の方々の発言から「傳」の字に変えさせていただいた。
- (6) 櫻井武氏の話では、櫻井家は天津で酒造りをしていたが、明治時代に火事を起こし、移転したという。現在、天津に残るもと酒蔵は、倉庫として使っているとのことである（写真1）。ここには代々の櫻井家の墓もある。
- (7) 櫻井美子氏によれば、櫻井かねは父親（七内）が亡くなったとき、まだ3歳だったということである。彼女をかわいがったのが伯父の傳三郎であり、彼女を養子にした。これは四男家が本家に入り込んだことになり、新宅とよばれていた三男家は複雑な心境であったのではないかという。
- (8) 小林武、後の櫻井武は二男と町誌には書かれているが、美子氏たちへのヒアリングでは、小林家の長男は警察官、次男は小林家を

造り酒屋の地域貢献活動

継ぎ、武は三男だということである。

- (9) 櫻井美子氏によれば、浅白観光自動車株式会社を設立したのは櫻井 武（もと小林 武）であるという。
- (10) 塩野谷氏は酒造納涼祭（夏祭り）の企画のみならず、ひな祭りや七夕など、季節の祭りを浅間酒造センターでおこなうことも企画・実施している。2017年の夏は、従業員の手形の付いた団扇がセンター内のエレベーター近くにきれいに並べられていた。
- (11) 本稿では「自社田」と呼んでいるが、これは地元の休耕田を浅間酒造が借りて米づくりをおこなっているのであって、自社で保有している田という意味ではない。
- (12) 櫻井 武氏によれば、2015年及び2016年に「オレの酒プロジェクト」と銘打った田植えから稲刈りまで米作りのプランをフェイスブックとチラシを活用して宣伝し、実施していたが、参加者はほとんど集まらなかったという。これにはネーミングの問題や情報発信のやり方の問題等が考えられるだろう。まずは、地元の人に楽しんでもらうプランを企画し、地元の浅間酒造ファンづくりとその拡大を目指すというやりかたもあるかもしれない。現在、河原湯温泉とのコラボレーションも実現化に向けて話し合われているようである。

〈参考文献〉

- 鈴木源太郎・河野陽一・井形雅代・佐藤暁彦・松丸佳生 2013「第3章 酒造業・観光業を核とした地域型多角経営の展開 ケース3 —浅間酒造株式会社・桜井芳樹氏の地域とともに歩む経営哲学—」『バイオビジネス・11 地域共生と事業多角化の挑戦者』pp.83-124
- 竹内英二 2009年11月 「小企業における地域貢献活動の実態」日本政策金融公庫総合研究所編『日本政策金融公庫論集』第5号 pp.1-22
- 長野原町誌編集委員会 1976『長野原町誌』上巻・下巻

〈参考サイト〉

- 浅間酒造株式会社ウェブ・ページ 浅間酒造観光センター「会社概要」「沿革」
<http://asama-sakagura.co.jp/about/>（2017年6月22日アクセス）
- 長野原町役場 町民生活課 住民係 「平成29年 人口集計表」
www1.town.naganohara.gunma.jp/www/contents.（2018年1月12日アクセス）
- 統計メモ帳「長野原町の5歳年齢階級別人口の推移」「長野原の人口に関する主な指数」
<https://ecitizen.jp/Population/City/10424>（2018年1月12日アクセス）